

	<p>2012年 7月15日 第91号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	--

キツネノカミソリのこと

キツネノカミソリはヒガンバナ科ヒガンバナ属で、里山の落葉樹の下や林縁に生え、花の咲く時には葉がない、ヒガンバナによく似た植物だ。若干の違いがあるので特徴をあげると次のようになる。まず咲く時季が一般にはヒガンバナより1~2ヶ月早く、7月の下旬から8月下旬で、花はヒガンバナのように横向きでなく斜め上から真上を向き、薬が花弁より突き出さないようだ(少し出るものもある)。一本の花柄に付く花の数がヒガンバナより少なく、花弁も先が丸みを帯び、あまり反り返らずラッパ状である。生えている場所によるのか色や薬の長さに差もあるようだが、ヒガンバナに比べて葉がやや広くのっぺりして、やや白っぽいと認識している。また、出たばかりの葉が真上向かず枝垂れて広がりやすく、短くてカミソリのように見えるのが、その名の由来だとの説がある。名前については花が狐色をしているからとか、キツネの住むような場所に生えるから、など諸説がある。

キツネノカミソリの自生地は関東から九州までだが、北海道南部にも帰化したとの記事もある。日本以外では朝鮮半島にもあるようだ。

区内のキツネノカミソリは赤塚植物園の他に、赤塚公園や日暮台公園の崖部などに殖えていて、野の花の少ない時期に咲くのだが、大きな群生はなく真夏でもあり注目されず、ひっそりと咲いているようだ。

ヒガンバナほど知名度は高くないが、キツネノカミソリを保護し群生させている所が豊田市にあり、0.5ヘクタールに1万本も咲くとか。千葉市の泉公園や調布市の深大寺、栃木県の三轟山などにもまとまって生えているそうだ。

キツネノカミソリは球根(鱗茎)の増殖で株が大きくなるが、種がよく出来て飛び散って群落が出来ていくようだ。在来のヒガンバナと同様に種子の出来ない種(染色体が3倍体)もあるという。

キツネノカミソリの仲間には、薬が花より突



赤塚植物園のやや赤みの強い個体

き出るムジナノカミソリという種が九州地方にあるそうだが、日南市では自生種が絶滅したとも報じられている。

葉などが大きいオオキツネノカミソリもあり、この種も葉が花よりはみ出して咲くそうだ。また、秋咲き種のキツネノカミソリもあり、花の色も黄白色のものもあるようだ。

ヒガンバナ科の仲間は花がきれいなこと、有毒の所為か虫も付かず丈夫で栽培が楽なことなどから、色いろな種類が栽培され、一部は野生化もしているので、主なものを記してみる。筆頭はなんと言っても各種のスイセン、スノードロップ、スノーフレック、クンシラン、ハマオモト(ハマユウ)、アマリリスと続き、アガパンサス、アルストロメリア(ユリズイセン)、リコリス、ネリネ、ナツズイセン、キルタンサス、アマゾンリリー(ギボウシズイセン)、ステルンベルギア、ゼフィランサスなどがあり、ゼフィランサスの仲間のタマスダレは道端でも見られるようだ。皆さんは何んな花を育てておられますか。



オシベが花弁より出ている花も見られる

キツネ×××と頭にキツネが付いた植物は、イヌ×××という名と同様に、形や色などの特徴以外に、やや劣るものと蔑んだ呼び方もあるようだが、キツネの付いた植物を参考までに書いてみる。

- ・キツネガヤ；イネ科(英名 bromus pauciflorus は疎に花が付く馬草の意)
- ・キツネノボタン；キンポウゲ科、種の形が金平糖コに似ているので、子供の頃コンペイトウと言っていた。
- ・キツネノテブクロ；ゴマノハグサ科、和名ジギタリス
- ・キツネのチャブクロ；ミツバウツギ科、ゴンズイの別名
- ・キツネユリ；ヤマユリの別名
- ・キツネアザミ；キク科
- ・キツネササゲ；マメ科、ノササゲの別名
- ・キツネナス；ナス科、園芸植物
- ・キツネノマクラ；ウリ科、カラスウリの別名
- ・キツネノロウソク；サトイモ科、カラスビシャクの別名
- ・キツネノマゴ；キツネノマゴ科(英名にはエジンバラ裁判所の書記官で園芸家 justicia の名あり)
- ・キツネヤナギ；ヤナギ科(狐の尾に似た花序から付けられた学名の訳とか)

あとがき

私は生まれ育った埼玉県純田園地帯で、咲いているヒガンバナを棒切れで打ち払ったりして遊んだが、キツネノカミソリは見たことがなかった。あるいは見た記憶がなかったと言うべきかも知れない。園芸を趣味とした中高年になってから知った植物で、その後もあまり関心がなく、会報に書けといわれて俄か勉強をし、撮り置き画像を眺めなおした次第。乏しい知識と図鑑やウェブの受け売りにすぎないゆえ、皆さんにご教授を仰ぎたい(猪鼻昭二)

オタマジャクシはどこへ行った？

トンボ池には毎年ヒキガエルがやってきて紐状の卵を産みます。梅まつりが開催される3月の第1週は暦の啓蟄にあたる頃で、落ち葉の下で冬眠していたカエルが目を覚まし、池にやってきて交尾し卵を生んで、また陸にもどって暖くなるまでもうひと眠りします。梅まつりの来場者は池にたくさんのカエルが泳いでいて、寒天の紐になった卵を見てびっくりされます。

やがて卵を包む寒天が溶けて、黒いつぶつぶが池底に沈んでいるのが見えます。しばらくして黒いつぶつぶはオタマジャクシになって池の縁に群れているのが見えます。

トンボ池が出来てから、13年間、私達はほとんど毎年、梅まつりの時にカエルが来て卵を産むのを見ています。しかし、カエルになるのを見たのは2005年の1回しかありません。そして2005年以外は、卵やオタマジャクシが忽然といなくなってしまうのです。

以前にも何度か取り上げたテーマですが、もう一度オタマジャクシはどこへ行ったのか考えてみました。

1) 子ども達(あるいはおじいちゃん)がカエルの卵を持って行った。

子供が中に入って、卵をすくっていたところを見た、という話をよく聞きます。卵は池の縁に近い浅いところに産むので確かにすくい取りやすいようです。でも全部取り切れるものでしょうか。

2) 子ども達がオタマジャクシを持って行った。

これもありそうです。でも取り残しがあってもよさそうです。

3) ザリガニがオタマジャクシを食べた。

私達はザリガニがオタマジャクシを襲うのを見ました。ザリガニのエサになることは間違いありません。この池には大食漢のザリガニがたくさんいるので食い尽くしたのかもしれない。ザリガニは気温が低ければ動きも少なく、暖くなると食欲旺盛になります。3月はザリガニも冬眠中なのでカエルの卵を食べることはありませんし、まだ肌寒い4月は卵やオタマジャクシを食い尽くすほどの食欲はなさそうに思えます。

4) 酸欠で死んだ。

大分前から、池にはしばしばプランクトンが発生し、水が腐って酸欠状態です。オタマジャクシは魚と同じエラ呼吸なので、酸欠で死んだとは考えられないでしょうか。小さいから死んで浮いてもわからない？水面でパクパクしているから酸欠でも困らない？

5) カルガモが食べた。

カルガモがときどき池に来ます。池にカルガモがいると「よかった、よかった」とみんなに歓迎されます。ネットで調べると、カルガモは雑食性が強く、タニシなども食べるとあ



プランクトンで汚れた池 (2012年5月)

ります。となるとカエルの卵やオタマジャクシは栄養満点のエサではないでしょうか。平らげている現場を見ていないので証拠はありませんが。みんなに愛されるカルガモですが、この小さなピオトープ池には大きすぎる生き物のように思えます。

6) カエルになって池から上陸した。

オタマジャクシはほぼ同じ時にカエルになって上陸します。気がついたら1匹もいないということもありそうです。しかし、今年は、4月28日にオタマジャクシを確認しましたが、5月12日には1匹もいませんでした。もし上陸したのなら、小さな豆ちゃんガエルがその辺にウロウロしているはずですが、水路の清掃したときも見えていません。小さなカエルを観察した年もあるので、オタマジャクシが全滅するということはないかもしれませんが、ほとんどがカエルになる前に姿を消したと思われる(写真右は2008年5月のトンボ池調査で見つかった子供のカエル)。



今年のトンボ池とオタマジャクシ、そこへかわいいカルガモが来た

今年は冬に池を干し、ヘドロをかき出す作業をしました。公園に来られた方に理解してもらうよう説明の張り紙もしました。雨も少なく幸いました。見た目は干上がっていても泥田のようで、足はとられるし、長年たまったヘドロは多くて重くてとても全部は除去できませんでした。(浅く小さくなった池には大きなコイなど6匹が浮いていました)。ヘドロを除去出来なくても、池底が空気に曝されてヘドロの分解が促進されるので、少しは浄化されたと考えます。梅まつりに間に合うように湧水を通水した後も池の水位はいつもよりかなり低い状態でした。4月には卵は無事オタマジャクシになり、「やっぱりオタマジャクシのためにはあまり水がない方がよさそうだね」と言い合いました。

5月12日、湧水の流れをよくするため、水路の清掃に伊丹さんと山田さんが来たときには、オタマジャクシはすっかりなくなり、カルガモが泳いでいて石の上に卵が1個あったそうです。



5月19日、アオコが大発生、アオコのためにザリガニの存在も確認できません。アオコの中で、

カルガモが泳いでいました。池の縁にある草むらにカゴが置かれ、卵が2個入っていました。6月16日、カゴの中は空っぽで、カルガモもいなくなり、池は水がいっぱいでザリガニがウヨウヨうごめいていました。

以下は、私が聞いた話です。誰かさんがカルガモの卵をカゴに移し入れ、池には野良猫がうろうろしているのですが(ここでエサを与える人もいる)野良猫が入らないようフェンスの下を塞ぎ、カルガモがすめるように、水道水を入れたそうです。

この池は人の関わりの多い池です。生き物が入れられたり、生き物を獲りに入ったり。公園の池より面白く(気になり)自然の池として中途半端な感じで、手を出したくなるのでしょうか。みなさんは、このことをどう思われますか。

オタマジャクシがカエルになった2005年の条件

2005年は池のアオコ対策のため梅まつりの終わった後に湧水の流入を止めました。池底を空気に触れさせてヘドロを分解し、池を浄化するためです。この年は雨も少なく、湧水も流入しなくなり、水面がどんどん小さくなり、全体が泥田のようになりました。オタマジャクシはごく浅い水たまりに集まっています。周囲が泥田なので、オタマジャクシを捕まえることが出来ません。池を見た人たちが「魚やオタマジャクシが死んじゃう。早く水を入れなきゃだめだ」と口々に言われ、心配になって少し水道水を入れたこともありました。5月12日、池の水はますます少なくなり、池を見に来た人たちに「池が干上がる。オタマジャクシがかわいそうで見ていられない」と責められました。よく見ると手足の出たオタマジャクシが上陸しそうになっています。「ほらもうカエルになるから大丈夫ですよ」と一生懸命に説得しました。数日後、この干上がった池には小さなカエルがいっぱい跳ねていました。そしてたくさんのムクドリが降り立ち、片っ端から豆ちゃんカエルを食べています。私は事の成り行きにあっけにとられました。というわけで相当数の豆カエルがムクドリのお腹におさまってしまいました。

ヒキガエルは、5000個ほどの卵を生み、オタマジャクシも手足がとれたカエルもとても小さく、無事に生き延びて大人のカエルになるのはわずかだと聞きました。

それはそれとして、生き物の世界は人間の好意と関係なく進行します。

さて、干上がった池にはおまけがありました。池が浅く狭くなってザリガニのすめる場所がほとんどなくなってしまったのです。小さく浅くなった池に多すぎるザリガニ。水面からザリガニの背中が出ていて外敵に丸見えです。過密環境なので脱皮時に仲間にも襲われるだろうし・・・この年、ザリガニはほとんど見あたらないほどに激減しました。

高いフェンスに囲まれていようが、お構いなし。いろいろな人がそれぞれの関心事から、あるいは無関心から介入し、さらには自然の成り行きによって、当初の目的と違った池になって行きます。さてどうしたらよいか、池の様子を観察しながら考えましょう。みなさんも池についてのご意見や観察結果等をお寄せ下さい(坂本 郁子)

雨の日の 西台公園

写真上は、6月22日の朝の西台公園です。気象庁の雨量データでは、練馬で6時の時間雨量は21.5mmでした。

道路から入れる新しい園路から水があふれ、ちょっとした滝（写真の矢印）のようになって斜面を流れ落ち、道路には泥水がたまっていました。

緑地が減り、コンクリートに覆われた東京では、まとまった雨が降ると下水道で処理できないため、公共施設や大規模マンションなどでは雨水を浸透させたり一時的に貯めたりする施設を設けることになっています。

率先して実践すべき区の公園で、泥水を垂れ流すなんてもってのほか。

それに緑地は本来、保水力の高い場所です。木の葉は雨を受け止め、雨粒の圧力を和らげ、また幹を伝ってゆっくり地面に落ちます。地面の下草も雨粒の圧力を和らげ、土が雨で洗い流されるのを防ぎます。

西台公園は板橋区に多い北向きの斜面樹林地を利用した公園です。地域限定の住民参加により改修計画が検討され、2011年、子供が遊べる安全で明る

い公園に生まれ変わりました。ときどき遊んでいる子供を見かけることはありますが、賑わいにはほど遠い遊園地です。下の写真は、同じ時間の滑り台付近です。やはり泥が流れ出ています。公園下の道路は泥水がたまって歩けない状態でした。

計画には住民の意見を尊重して整備したことになっており、急斜面の樹林地の枝をはらい、常緑樹や低木等を切り、造成しました。そして公園は開設した日から好きなところで遊べるようになっています。出来たばかりのときは子ども達も遊びに来ていました。植えたばかりの植栽など



お構いなしにどこでも遊ぶし、確かにそのほうが面白い。斜面の急ごしらえの植栽は雨に弱い。設計業者の持ち込む図面の見た目のよさに惑わされ、完成直後のかっこよさが優先し、時間がたつとどうなるかを全く考えられていません。写真のようになることはこれまでの公園整備の結果を見れば予測できることです。園内に雨水浸透ます等が設置されているようですが、地面に設置した雨水浸透ます（トレンチ）は泥水が流れ込むためすぐに目詰まりして、全く役に立たず、排水は下水管に直結しているようなものです。そしてはげ山寸前になっても、やっと生えている下草は毎年刈られ、ますます雨の流出を促進させています。私は西台公園を毎日見えています。雨で道路に泥が流され、はげ山を見るたびに腹立たしく、なさけない思いで、写真を撮って記録しています。

明治神宮の森は100年先を考えて作られたそうです。公園緑地は、今の子ども達だけのものではなく、将来の区民の財産でもあります。今すぐに子ども達に大喜びしてもらえることだけ考えてはよい公園はできません。公園緑地整備の前提をしっかりと考えてほしいと思います。

いたばし水と緑の会では、7月4日、板橋区の公園になっている樹林地の保全についておなじみの団体と共同で要望書を出しました。あらまは次号でお知らせします（坂本 郁子）

観察と活動の記録

5月12日（土）湧水水路の泥さらえ オタマジャクシ1匹も見あたらず

5月19日（土）湧水水路の泥さらえ トンボ池はプランクトン大発生し、池にザリガニ見あたらぬ（水路にはザリガニあり）。またオタマジャクシもカエルの子供も1匹も見あたらぬ。カルガモが池に産卵（卵2個）。

5月26日（土）成増1丁目向新田の森観察とササ刈。

6月16日（土）バッタ広場ササ刈、外来種の抜き取り。ホソオビアシブトクチバ、クマバチ、ツトガ、オオウンモンクチバ、キマダラセセリ、トンボ池で投げ込まれたヤナギの枝から芽。

6月23日（土）ミニトンボ池はアオコで汚れている。ザリガニ多。ザリガニ獲りの形跡。トンボ池ザリガニ多くザリガニトラップが放置されていた。アカミミガメがまた放されている。オオシオカラトンボ、

バッタ広場の樹木等の丈の切り詰め、オギの刈り取り、セイタカアワダチソウ、オオマツヨイグサ、ブタクサ等の除去（写真左は刈り込み前、右は刈り込み後）



活動のお知らせ

運営委員会：8月25日(土) 12:30~13:30

作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。雨天でもご参加下さい。

連絡先；坂本(090-4618-1295)

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：9月15日(土) 12:30~

活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで

赤塚公園観察(ミニトンボ池~湧水の様子~大門地区~四葉・・行けるところまで)

7月28日(土) 10:00~12:00 赤塚トンボ池前集合(美術館そば)

バッタ広場のバッタ類の調査

8月25日(土) 10:00~12:00 赤塚トンボ池前集合(美術館そば)。遅れる人は直接バッタ広場へ。

持ってくるもの：あれば昆虫網、図鑑。暑いので帽子、飲み物

赤塚ビオトープの観察と環境整備(雨天の場合は観察とゴミ拾い)

飲み物、軍手、タオル、汚れてもよい服装。カメラ、ルーペ、双眼鏡、図鑑等があると楽しい

9月15日(土) 10:00~12:00 ササ刈等を中心に

日暮台公園樹林地観察会(原則として第1土曜日)(樹林地内の推移と林縁植物を観察)

8月4日(土) 10:00~11:00 日暮台公園前集合

9月1日(土) 10:00~11:00 日暮台公園前集合

ビオトープ管理のボランティア大歓迎

生き物のすめる草地(バッタ広場)などの管理作業を応援していただけませんか。

大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったりしています。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)